

ビートキッズ (BEAT KIDS)

2005(平成17)年2月4日鑑賞(試写会・IMPホール)

★★★★



第2章

やっぱり楽しいのが一番!

監督=塩屋俊/出演=森口貴大/相武紗季/市道信義/古河弘基/田中康平/豊川悦司/余貴美子/渡辺いっけい(松竹配給/2005年日本映画/115分)

……大ヒットした矢口史靖監督の『スウィングガールズ』(04年)の向こうを張るかのように、塩屋俊監督が大阪発の高校生バンドを大爆発させた! 舞台は岸和田。だんじり祭りのエネルギーとリズムが、音楽だけではなく人間模様にも波及し、面白い人物像が浮き彫りに……。演技の素人を主演に抜擢したのは大バクチだが、その是非論なんかはどうでもええ! 完成披露試写会のライブで聴いた、この映画の主題曲『喜怒哀楽』はええゾ!

🎬原作と高校生バンド探し

原作は、元プラスバンド部で今は高校生の子供をもつ専業主婦である風野潮の同名ベストセラー小説。その舞台となるのは大阪府岸和田市だ。このビートキッズとは、高校生のロックバンドの名前。塩屋俊監督は、全国規模のオーディションを開いて数多くのバンドを見たがどれも決め手にかけていたところ、大阪の府立高校の現役高校生バンドで2004年5月にメジャーデビューした「HUNGRY DAYS」の演奏を聴いて「これだ!」と感じたとのこと。主人公となる横山英二(エージ)は「HUNGRY DAYS」のドラムスの森口貴大。他の3人もそれぞれ、ゲンタ=市道信義、シゲ=古河弘基、サトシ=田中康平。音楽主体で選んだバンドはピッタリ理想型のものだが、果たして演技の方は……?

🎬演技指導は苦労の連続……?

最近の若い奴は、おとなしいのが多い! とりわけ若い男はそう……? 私は

いつもそう思っている。その私の評価どおり、現役の高校生バンド「HUNGRY DAYS」も、演奏や歌はいいけれど、しゃべりはまるでダメだったよう。カメラの前で演技をするのは、ド素人からのスタートだから塩屋俊監督が苦労したのはそりゃ当然！ しかし、この塩屋俊監督は、長年アクターズクリニックをやってきた中でねばり強い演技指導に定評があるらしい。10年間の経験を注入して指導した結果、やっと森口貴大はエージになり切れたとのことだ。しかし私が見る限り、やはり素人は素人。果たしてその演技の出来は……？

坂和弁護士と岸和田支部

私は弁護士になって30年を過ぎたが、岸和田市岸城町にあった大阪地方裁判所岸和田支部にはよく通ったものだ。ここは、電車では南海電車の急行が停まる岸和田駅から普通電車に乗り換えて、1つ向こうにある「蛸地蔵駅」から歩いて5分位のところにあった。若い頃はよく電車で、ある時からは車でよく通ったものだ。岸和田支部は2000（平成12）年からは岸和田駅の2つ手前の春木駅から徒歩12分の岸和田市加守町に移転したが、それまでは岸和田城のすぐ近くにあった。したがって裁判所に通うたびに美しい岸和田城をいつも眺めていたものだ。

この岸和田支部に行く時、私がよく立ち寄った喫茶店がある。その名前は書かないが、そこはあの清原和博選手の後援会受付があるビルのすぐ近く。PL学園でピッチャーの桑田真澄選手とともに活躍して甲子園を沸かせたものの、読売巨人軍からの第1位指名が桑田となったため、涙の会見をしたオトコ清原はその後西武ライオンズで大スターに成長したが、今は読売巨人軍の中できわめて微妙な立場。何が何でも今年2005年が勝負の年に追い込まれている。そのオトコ清原の故郷が、ここ岸和田だ。

私が観覧席に座ってだんじり祭を見学したのは、2003年9月の1回だけ。そのチケットを手に入れるだけでも普通は大変なもの。他方、裁判所への仕事で岸和田支部へ行った時がたまたまだんじり祭と重なったため、動きがとれず立ち往生したこともあった。それくらい岸和田にとっては、だんじり祭は何よりも大切なイベント。そのうえ、岸和田の人たちにとってはまさに「だんじり命！」であり、このだんじり祭に参加するために1年働いているような人たちがたくさんいる。

したがって、この映画を語るについてはだんじり祭の理解が不可欠だし、その雰囲気やだんじり祭についての岸和田の人々の心意気(?)を知らないでは、この映画の理解は絶対ムリ！ 私の依頼者にも「だんじり命」という人間が現実にはいた。運送会社に勤めていたこのIさんは、9月のだんじり祭が近づくと仕事なんかはろくに手がかず、祭り当日ともなれば、どんな仕事があってもそんなモノは関係なし！という雰囲気だった。

■試写会でのライブには興奮したが……？

2月4日6:30から、IMPホールで開演された『ビートキッズ』完成披露試写会は、何と、ビートキッズこと HUNGRY DAYS のライブ演奏つき！ メンバーの4人が登場し、大音響のもとで歌った2曲はそれなりに良かったが、あまりにも大音響であったため歌詞が聞きとれなかった。映画の中で歌われているのを聴いてやっと、ああこういう歌詞だったのかということが少しわかったが、せっかくライブを聴かせてくれるのだから、もう少し親切に歌詞カードくらい配ってくれたらいいのと思う。この映画の主題歌は、『喜怒哀楽』というタイトルの曲で、くり返されるサビの部分の歌詞は、「声を出して歌を歌う。ああそれだけでいい。喜怒哀楽、人間すばらしい。生まれてきて良かったな」というものだが、何しろライブではこの歌詞がほとんど聞きとれなかったため、何を言っているのかわからない。これでは、せっかくのライブがもったいないと思うのだが……？

■何とも面白い相武紗季のキャラ！

この映画のもう1人の主人公は菅野七生^{ナナオ}を演ずる美少女、相武紗季^{あいぶさき}。何とも変わった名前で、この名前をきちんと読める人は少ないのでは……？ このキャラが何とも面白い！ 彼女はエージと同じ高校2年生だが、音楽の天才で、ピアノからドラムまで何でもオーケー。小さい頃には外国の有名なミュージシャンとセッションしたことも……。菅野楽器店の娘だが、そこには少し悩ましい出生のヒミツも……。こんなナナオは天陽高校のブラスバンド部のキャプテンであり、かつ事実上の指導教官。自分のことを「ボク」としゃべり、すべてに命令口調。見方によっては何ともイヤな女だが、高校生離れした天才的能力の持ち主だから誰

も文句は言えない。いやそれ以上に妙な「求心力」をもった根っからのリーダー。

そんなナナオが、いつもだんじりのリズムを刻んでいるエージに興味を示し、ブラスバンド部に入部してきた（無理やり入部させた）エージをトコトンしごいていく中で、2人の間には友情、愛情、信頼などさまざまな要素が入りまじった何ともいえない感情が……。そしてナナオ率いるブラスバンド部は年に1度のマーチングコンテストで見事……？

エージの両親も面白い！

エージの父親、横山正英に扮するのは豊川悦司。彼はだんじりの花形の大工方だった男。大工方とは、うちわを両手に持ってだんじりの大屋根の上に立ちバランスをとりながら跳び回る最も華やかな役だが、その反面危険もいっぱい。「だんじり命」の正英は、ある時カーブを曲がるだんじりの上から地上に落下！ それ以来正英は生きる希望を失い、今は酒とバクチにうつつを抜かす毎日。もっとも、酒とバクチだけにとどまっているところがまだエライ（？）としておこう。

他方、母親の美春（余貴美子）はこんなゲータラ亭主を温かく見守り、ガミガミと文句を言うこともなかったから、一応家庭の中は平穏。この美春はエージにとってもいい母親。ちょっと身体が弱いが料理もうまいし、話し相手として最適……。そんな美春が妊娠。そして検査したところ、エージの妹ができたらしいことが判明。家族3人それぞれ大喜びだったが……。

ところが、「好事魔多し」とはよく言ったもの。マーチングコンテストの会場に向かっていた美春が突然倒れ、担ぎ込まれた病院で何とか出産したものの、妹となるべき赤ん坊は死産！ そんな中、正英とエージとの仲は突然険悪に……。スクリーン上で展開される父子ゲンカの様子を観ていると、今どきのキレる子供というイメージがあるだけにちょっとヤバイ、と感じたが……？

府知事の出演はライブ許可の見返り……？

若者のロックバンドが大人たちに嫌われる（？）のは、その反抗性や服装もあるが、その大音響のせいもある……。路上ライブをするについて法制度上どんな許可が必要なのか私は知らないが、この映画の1つの「ウリ」が大阪府庁玄関

前でのライブ。これを許可したのは当然大阪府知事の太田房江ということになる。

他方、この映画の紹介には必ずこの太田知事が自慢のピアノ演奏をしていることが書かれている。一体どんなシーンなのかと思っていたら、何のことはない。音楽教師役の知事が、声楽部の部員たちを前にしてピアノを弾くシーンがほんのちょっと挿入されているだけ。別に何の必然性もないシーンだし、特段魅力的なシーンでもない。こりゃ明らかに、府庁玄関前ライブを許可していただいた見返り（お礼）として、府知事に華をもたせただけのこと……？ ところが、それが公式の宣伝文句になると、「現大阪府知事・太田房江氏が音楽教師として美しいピアノ演奏を披露している」となってしまうからコワイ！ そもそもこの映画にこんなシーンは全く不要だよ！

すべては名校長のおかげ……？

「ビートキッズ」のゲンタ、シゲ、サトシの3人はもともとナナオの信奉者だが、いわば札付きの不良。しかしエージはそういう人種(?)に対するこだわりは全くなく、ドラムをたたいていると自分が幸せになれるという自然児タイプ。だから何の抵抗もなくその3人の中に入っていくことができ、仲間になることができた。

猛練習に明け暮れる日々だったが、こんなロックバンドを高校の文化祭に出演させるかどうかになると、大人の世界では意見が分かれるのが当然。そして、声楽部の顧問であり、ことごとくナナオと対立してきた「音楽家」の細井先生（渡辺いっけい）が、ロック音楽に理解を示さず強硬に反対したのも当然。しかし、この映画の節目節目に登場し、最終判断を下す中村雅俊扮する校長先生がエライ！ エージとナナオを主人公として物語を進行させ、ビートキッズという4人のロックバンドを目いっぱい引き立たせることができたのは、すべてこの校長先生のおかげかも……？

2005(平成17)年2月7日記